

ま え が き

この特集号は、1965年9月号および1966年9月号にひきつづき、本誌における中国特集第3号としてつくられたものである。

第1号と第2号は次の二点において同じ性格をもつものであった。すなわち、テーマと方法に統一性がなく、したがって形式的にはたんなる論文集にすぎなかったこと、および執筆者が当研究所調査研究部東アジア調査室に属するメンバーに限られたこと、である。本号には、そのような状況に対して根本的な改善を加えようという努力がおりこまれている。

この特集号においては表題のごとき統一テーマが選ばれたが、それは以下のような共通の認識にもとづくものである。すなわち、現在世界の耳目を集めつつある「文化大革命」は多くの局面において中国の今後の方向をきめることとなるであろうが、「文化大革命」の真の理解のためには、それに先だつ「大躍進」に対する十分な認識がまずもって必要である。ところが、大躍進がどのような課題をになうものであり、それがどのようにして現実のものとなり、その過程で具体的に何が行なわれ、それがどのような「後果」を残したか、の諸点をあきらかにする作業がこれまで十分になされたとは言い難い。少なくとも、この時点においてこれらの問題を包括的な形で再整理または再評価することが何らかの積極的な意味をもつにちがいない、というわけである。この特集号の課題は以上のような問題意識に沿って設定された。ただ、研究の方法および重点の所在については執筆者の自由に任せざるをえなかった。

以上の意図にてらしていえば、本号の成果はけっして満足なものではなかった。設定されたテーマの重要性または包括性をあわせ考えるとき、特にその感が深い。今後における継続的な努力の対象としたい。

この特集号が計画された当初において、当研究所のスタッフのみによって要求される問題の領域をカバーすることは不可能と思われた。そこで外部の諸先生の援助をあおぐこととなった。ところが、お願いした先生のうちにも外遊中の方があつたり、また一度お引受けいただいた先生の中に不測の事態が生じて執筆いただけなくなったりして、期待した規模のご助力を得られなかったのは残念である。ご執筆いただいた斎藤秋男、菅沼正久、平松茂雄の諸先生についても、準備期間が不当に短かかったり、テーマについて過度の要求をおしついたりしてご迷惑をおかけした。ここに感謝とともにおわびの意を表したい。

この特集号の作成にあたって最大の障害となったものは、内部のスタッフの中に執筆できるものが少なかったことである。昨年の特集号の執筆者のうち、徳田教之および小林文男は外地滞在中、中兼和津次は内地留学中、川村嘉夫は一身上のつごうにより、それぞれ参加することができなかった。今後においては、これらのメンバーおよび数名の新入職員等の参加が期待できるであろう。

(尾上悦三)